

肥前磁器と初期マイセン磁器 (4)

松 尾 展 成

目 次

- (1) 初めに
- (2) 中国における磁器の生産 (30巻3号)
- (3) 日本における磁器の生産 (30巻4号)
- (4) アジア・アフリカへの中国磁器輸出
 - (i) 時代別概観
 - (ii) 一括伝世品 (31巻2号)
 - (iii) 遺跡出土品 (本号)

(iii) 遺 跡 出 土 品

ここで、アジア・アフリカの遺跡から出土した中国磁器を、東アジア、東南アジア大陸部、同島嶼部、南アジア、西アジア、アフリカの順に、一瞥する。その場合、この地域の沈没船引揚品、したがって、ヨーロッパ船のそれも含める。公海の沈没船は便宜上、近隣の一国に所属させた。このような遺跡は、寡聞な私が『貿易陶磁研究』誌などで読むことのできた、僅かな著作に記載されているものだけでも、数多いけれども、ここでは、中国磁器を大量に出土する遺跡に限定する。とくに、日本の遺跡では、精良品を多く含むとされる平安京を例外として、中国磁器出土数量が具体的に約百点以上と明示されている遺跡のみを、紹介する。したがって、単に「多く」あるいは「多量に」出土する、と記述⁽¹⁾されている遺跡は、取り上げない。また、日本の展覧会図録とほぼ同じ理由から、発掘調査報告書は参照しなかった。出

土磁器総数と種目別内訳は大体において概数に丸めた。それらが明示されていないグラフや表から、私が計算した数値、および、中国製品中の磁器の数量に、誤りがある⁽²⁾ことを恐れている。磁器の数量が分離されていない時には、中国産貿易陶磁器の合計を示した。博多のような貿易拠点を除く一般消費地では、交易品の運搬用容器としての、磁器以外の中国産やきものは少ないであろう。

なお、インド洋海域に関する論文、佐々木達 1993は、次の一般的指摘を含む。「西アジアのインド洋沿岸、アラビア（ペルシア）湾、東アフリカ沿岸の遺跡ならどこでも中国陶磁器が出土しており、数多くの報告がすでに発表された。そうした知識を集成して、中国陶磁器の出土地だけを地図に落としても、単に海岸線や都市の上を塗り潰すだけで、研究の進展を期待できない。ある種類の陶磁器が出土した遺跡名を列挙する論文は、一見具体的に見えるが、研究を高めるものでもない」。「最近は…概説的な文章から結論だけを抜いた論文もみられる。…基本的な出土状況についても、著名な遺跡の場合でさえ誤解されていることがある⁽³⁾」。これは厳しい研究史批判と考えられる。ところで、私の関心は、遺跡ないし出土やきものの全体的把握を目指す、場合によっては、1片の破片を陶磁史の中に位置づけようとする、考古学者・陶磁史研究者の関心より遥かに狭小浅薄である。すなわち、第1に、出土したやきものの総点数、第2に、その中の中国磁器について総点数、各種目（青磁、白磁、青花磁器、五彩磁器）の点数、および、それらの大まかな製作年代と産地、第3に、その他の特徴的事項（第1に、中国産貿易陶磁器のうち磁器以外の点数、第2に、中国産以外の貿易陶磁器〔日本の遺跡では肥前磁器を含ませる〕の点数、第3に、第2の中の肥前磁器の点数）のみが私の問題である。しかしながら、研究史に疎い私は、これらの問題に対する概括的論説を知らないので、厚顔にも敢えて本節を書くことにした。

(注)

- (1) このように記述する論文は、出土やきものの種目別比率のみを掲げて、全体および種目別の実数をまったく示さない論考と同じように、陶磁史に関する独立論文として十分な意味を持つのであろうか。これは、品質とともに数量も具体的に追求する必要がある、また、それぞれの母集団が大きい場合にのみ、それに基づく比率の比較は有意義である、と考える一経済史研究者の素朴な疑問である。
- (2) これは、磁器の種目、例えば、白磁、の小分類毎の点数を示すが、山本 1990などと異なって、その種目の総点数を明示しない専門的論文から、私が集計した場合に、生じている可能性が高い。なお、長沙窯製品は、原著者がそれを磁ないし陶磁と記しているときには、磁器として、陶器と表現している場合には、陶器として、便宜上計算した。
- (3) 佐々木達 1993, p. 91.

(1) 中国

- (1) 江蘇省揚州城。唐代にイスラム商人との交易が行なわれていた揚州城で、唐代陶磁器破片15千点が発掘された。その多くは長沙窯磁器である⁽¹⁾。
- (2) 浙江省寧波港・沈没船。中国学会 1991によれば、9世紀末の越州窯青磁と長沙窯青釉褐彩器、数百個が引き揚げられた。これらは、明州（現・寧波）から日本や朝鮮に輸出される直前のものであろう⁽²⁾。三上 1988(a)によれば、かつての波止場から晩唐・五代の越州窯青磁と「長沙…窯磁」、7百点余りが発掘された。量的には前者が多い⁽³⁾。
- (3) 広東省川山群島沖・沈没船。宋・元代の陶磁器43個以上が引き揚げられた。これらは、龍泉窯系青磁や福建省産の青白磁・白磁を中心とする、東南アジア向けの日用品である⁽⁴⁾。

(注)

- (1) 中国学会 1991, p. 183. なお、三上 1988(a)によれば、「長沙…窯磁」は1千片以上である。三上 1988(a), pp. 112-113.
- (2) 中国学会 1991, p. 207.
- (3) 三上 1988(a), p. 114.
- (4) 弓場 1993, pp. 16-17, 19 (この論文には、「陶磁史に関していえば、筆者が先に本誌で紹介した「ヴンタオカーゴ」や「ハッチャーカーゴ」、「ヴィッテレウ船」などである」と記されている。論説の文章について私は、「……「ヴンタオカーゴ」(本誌472号

の筆者論文参照),「ハッチャーカージ」や「ヴィッテレウ船」……」程度の論理性を要望したい)。

(2) モンゴル

- (1) カラホト。元代の陶磁器破片約2千点が出土した。中心は青花磁器で、精巧な小品が多い⁽¹⁾。

(注)

- (1) 三杉 1976, p.148. さらに, 三杉 1984, p.199を参照。これらは現在ロシア・ペテルブルク市のエルミタージュ美術館に所蔵されている。

(3) 朝鮮半島

- (1) 忠清南道・扶蘇山。900年前後の越州窯青磁12個が出土した⁽¹⁾。
- (2) 江原道・春川邑。出土品は宋代景德鎮窯の青白磁30個である⁽²⁾。
- (3) 全羅南道・新安沖沈没船。この沈没船から積荷が周到に引き揚げられた。山本 1997によれば、これらの遺物は銅銭約28トンとその他の積荷約22千点を含む。後者の最大部分は陶磁器で、その量は約20.7千点である。陶磁器のはぼすべてが中国産で、内訳は、青磁約12.4千点、青白磁・白磁約5.3千点、褐釉・雑釉土器約2.3千点、黒釉類約0.5千点、などである。中国陶磁器の産地・品質を見ると、「全体量の57%」を占める青磁は、大部分が浙江省龍泉窯系であり、その中の、「普通・粗質の割合は…98%に達する」。「全体量の27%」を占める青白磁・白磁は、大部分が江西省景德鎮窯系であり、その中の、「一般・普通・粗質の割合は…91%に達する」。つまり、両者とも精良品は少ない。「大半の陶磁器は浙江とその周辺で生産されたもので、他の地域の窯と思われる製品は構成量が1%以下である」。中国陶磁器の製作年代を見ると、龍泉窯系青磁の大部分、9割は元類型であり、残りの1割は優秀な南宋類型である。南宋類型は、元類型と同じ元代に生産されたが、間もなく焼造されなくなった。景德鎮窯白磁は、典型的な枢府白磁⁽³⁾と元代青花磁器

とが量的に優勢となる時期の直前のものである(この引揚品に青花磁器が見られない事態は、その発生時期を決定するものではない)。ごく少数の中国陶磁器(修理した黒釉類の一部など)、および、百ないし2百年前の高麗青磁(7点)は、骨董品である。この船が沈没したのは、「至治参年五月」から「至治参年六月一日」までの紀年銘荷札(木簡)8点から判断して、1323年である。また、木簡に記された社寺名・人名の大半は、日本に關係する。京都市・「東福寺」41点、福岡市・承天寺「釣寂庵」5点、福岡市・「筥崎宮」3点、「又七」20点、「八郎」18点、などである。「綱司」(実質的な荷主)の木簡も110点ある。この船の出航地は、引き揚げられた「慶元路」銘青銅錘から、慶元(現・寧波)である。ここは、積荷の陶磁器の集散地として適当である。船の目的地は博多港である。「近年の考古学調査によると、博多遺跡群において、通常の生活遺跡では得られないほどのおびただしい中国産陶磁器が検出され、新安沈没船で見た「綱司」……などの貿易商を示す墨書土器が多数出土している」。さらに、「新安陶磁器構成内容をみるとその多くは日本出土品や伝世品と一致している⁽⁴⁾」。したがって、引き揚げられたやきものの84%が磁器である。

亀井 1997(a)によれば、引き揚げられた「2万点以上にのぼる」陶磁器は、ほぼすべてが中国製である。「中国製陶磁器は14世紀前半につくられたものがほとんどを占めている」。「生産年代のさかのぼる陶磁器もあり」、7点の高麗青磁の一部は「おそくとも13世紀前半につくられた」。高麗青磁は11世紀以来、「中国への輸出品」であったからである。ところで、「紀年銘のある木牌のうち、最も新しいものは「至治参年(1332)六月十一日」であり、この船の沈没年はこの年月と断定」される⁽⁵⁾。

三上 1987によれば、この船は至治3(1323)年もしくは1320年代に沈没した。引き揚げられた中国磁器の中には、白磁鉄斑文水滴のように、日本では見られないが、東南アジア諸国では普遍的に出土する器形のものがある。したがって、この船は、日本に続いて、沖縄や東南アジアにも向かう船であっ

た⁽⁶⁾。

岡田 1986によれば、この船は、唯一の貿易港として1322年に許可されたばかりの慶元路を、1323年6月中・下旬に出発し、博多を目指した船である。引き揚げられた中国陶磁器は、約17.3千点（青磁約9.8千、白磁約4.9千、雑釉約2千、など）であり、主として浙江・江西省の製品である。中国南部沿岸地方の雑釉器、褐釉壺は、南海産の交易品（生薬、胡椒など）の運搬用容器である⁽⁷⁾。

（注）

（1）三上 1987, pp. 147-148, 158-159.

（2）中国学会 1991, p. 285. なお、中国学会 1991によれば、11世紀半ばから13世紀半ばまでの期間に、中国商人は高麗国王に「土物を献」じ、また、民間貿易を行なった。その場合、中国船の「多くは積載量が比較的小さい小舟」であった。中国学会 1991, pp. 284-285. さらに、矢部 1992によれば、「高麗の貴紳たちは好んで最高級の中国陶磁を買求めた。その執拗な要求には北宋政府も手を焼いたらしく」、一文人官僚は、「高麗国への陶磁の送付を休止するように建白」したほどである。矢部 1992, pp. 171-172. それに対して、岡田 1986によれば、高麗は青磁を輸出したけれども、「中国産陶磁器を殆んど輸入しなかった」。岡田 1986, pp. 116-117.

（3）枢府白磁は、端正な円形器（碗など）として、元代の景德镇で製作された。比較的簡単な文様が型押しされ、失透性の白色釉が施された。「枢府」銘が型押しされたものは、「元代官府の専用器」であり、銘款のないものは、「民用商品」である。中国学会 1991, pp. 315-316.

（4）山本 1997, pp. 151-156, 158, 160-161, 164-167. さらに、横田・森本・山本 1989, pp. 26-27, 36（陶磁器約2万点の「大部分が一般質、あるいは粗質」である。最も多い青磁では、98%が「一般質、一般文・素文」である。第2位の白磁のうち、①青白磁は約3.7千点で、93%が「一般質（良質・普通質）」であり、②白磁は約1.4千点で、44%が「普通質」、25%が「粗質」である。その他では、約2.2千点の「褐釉陶磁器」が最も多い。東南アジアに多いとされる、型造りの青白磁小型品は、日本でも出土している）を参照。

（5）亀井 1997(a), pp. 82-83. さらに、亀井 1986, pp. 182-200を参照。

（6）三上 1987, pp. 260-261, 274-275.

（7）岡田 1986, pp. 118-119, 123, 125-127, 145-147, 149. さらに、養 1998, p. 119; 今井 1997, pp. 131-132; 長谷部・今井 1995, pp. 91-92, 119-120; 矢部 1994, pp. 227-228; 弓場 1991, pp. 17-18, 20; 中国学会 1991, p. 323; 池崎・森本 1988(b), pp. 148-150; 村井 1987, pp. 120-125（積荷の陶磁器は「品質が良い」ばかりでなく、そ

の量は「これまで日本国内で出土したものの総量に匹敵する」；三杉 1986, pp. 104-106；三杉 1984, pp. 56-58を参照。

(4) 日本

以下のうち(1)は概観である。(2)以後では遺跡を、その年代・種類とは無関係に、都道府県別にはば東北から西南の順に、紹介する。

(1) 土橋 1997によれば、7世紀から19世紀までの輸入陶磁器が出土した遺跡の数は、日本全体で6,912であり、すべての都道府県に及ぶ。世紀別の遺跡数(数世紀にまたがる遺跡があるために、合計数は15,493となる)は、次のとおりである。カッコ内は第1位と第2位の、さらに、遺跡数170以上の、都道府県名とその遺跡数を示している。

7世紀	15 (①奈良 8, ②福岡 4)
8世紀	80 (①福岡 36, ②奈良 25)
9世紀	359 (①福岡 154, ②京都 72)
10世紀	446 (①福岡 184, ②京都 87)
11世紀	705 (①福岡 196, ②滋賀 118)
12世紀	2607 (①福岡 458, ②京都 438, ③大阪 175)
13世紀	3337 (①京都 454, ②福岡 369, ③大阪 243, ④神奈川 178)
14世紀	2771 (①京都 340, ②神奈川 211, ③福岡 187)
15世紀	2487 (①大阪 212, ②京都・広島 134)
16世紀	2086 (①大阪 223, ②京都 113)
17世紀	462 (①大阪 130, ②高知 50)
18世紀	84 (①東京 19, ②福岡 10)
19世紀	54 (①東京 14, ②北海道 13)。

以上から見ると、白磁が安定的に供給され、青磁が流通しはじめる12世紀に、遺跡数は「爆発的に増大」した。遺跡数が最大になるのは、13世紀であり、大量の龍泉窯系青磁が「全国各地に地域差なく」流通した⁽¹⁾。

吉岡 1997によれば、8世紀中葉から11世紀初葉までの初期貿易陶磁器の出土地は、鴻臚館跡を除くと、全国で216遺跡、出土破片は約28百点にすぎない。10世紀には中国陶磁器、とりわけ粗質の越州窯系碗、の輸入が増加した。しかし、「この段階では90%以上が九州、とくに太宰府周辺と博多湾岸の官衙・寺院・墳墓および優位村落から出土」している。11世紀中頃に貿易都市博多が誕生し、輸入が激増した⁽²⁾。

佐々木達 1992によれば、「中国の陶磁器は8世紀にわずかな量が日本に輸入された」。8世紀後半から9世紀初頭の白磁・青磁などは、平城京や太宰府から出土している。9世紀中頃から10世紀前半にかけて出土遺跡の分布は、国府や国分寺を中心として、広がった。代表的な製品は中国北部産白磁、越州窯青磁などである。10世紀後半—11世紀初頭には、各地の出土例は減少するが、平安京と北部九州の出土量は増加する。越州窯青磁と中国南部産白磁が多い。11世紀中頃—12世紀前半には、中国南部産と推定される白磁が、日本各地の遺跡から大量に発見される。12世紀後半から青磁がふたたび増加する。龍泉窯と同安窯の製品が中心である。13世紀には、各地の遺跡から龍泉窯の青磁が大量に検出される。白磁も多い。「14世紀後半からは、日本全土を中国陶磁器が厚く覆っている」。主として龍泉窯、景德鎮窯などの青磁、白磁、青白磁である。15世紀には、中国陶磁器の使用量がさらに増加する。これらの青磁・白磁の産地は景德鎮と福建省などであろう。「16世紀は、どこでも中国の陶磁器が出土し、量もいっそう増えている」。中心は景德鎮の青花磁器である。しかし、17世紀中頃以後は、肥前青花磁器と瀬戸・美濃陶器などの日本陶磁器が、圧倒的となり、中国陶磁器は、「例外的に発見される程度」にまで、減少する⁽³⁾。

出土品ではないけれども、17世紀の中国磁器輸入数量がフォルカー 1981 (25) に示されている。すなわち、1635年に13.5万個であり、37年には75万個に達した⁽⁴⁾。

(2) 北海道上ノ国町・勝山館。出土した中国磁器は、青花磁器11百、白磁8

百，青磁3百，など，約22百点（やきもの全体の59％）である．时期的には16世紀の製品が中心である⁽⁵⁾．

(3) 青森県内・中世諸城跡

(a) 青森市・尻八館．出土中国磁器は，白磁63，青磁46，など，計112点（やきもの全体の57％）である．主として14—15世紀の製品である⁽⁶⁾．

(b) 浪岡町・浪岡城．16世紀末に滅んだ城跡から，青磁14百，青花磁器11百，白磁5百，など，合計約3千点の中国磁器（やきもの全体の53％）が発掘された⁽⁷⁾．

(4) 青森県市浦町・十三湊遺跡．検出された中国磁器は，領主館地区と家臣団屋敷地区（両者の最盛期は1400年前後）において170+279片，やきもの全体の27ないし14％（龍泉窯系青磁約75％，白磁17ないし23％）であり，町屋地区（15世紀前半）において90片，やきもの全体の67％（龍泉窯系青磁25％，白磁75％）である⁽⁸⁾．

(5) 岩手県内・中世諸城跡

(a) 石鳥谷町・大瀬川館．出土中国磁器は，青花磁器102，白磁63，など，合計198点（やきもの全体の72％）である．16世紀の製品が中心である⁽⁹⁾．

(b) 紫波町・柳田館．出土中国磁器は，青花磁器4.6百，白磁2.2百，青磁1.4百，合計約8.1百点（やきもの全体の65％）である．主として16世紀の製品である⁽¹⁰⁾．

(6) 岩手県平泉町・平泉遺跡群．1189年滅亡の柳之御所，志羅山遺跡，泉屋遺跡の輸入磁器は，合計約27百点（輸入陶磁器の9割）である．そのうち，種類では白磁が21百，青磁3百（主に龍泉窯系），青白磁3百点であり，时期的には大部分が12世紀の輸入品である⁽¹¹⁾．

(7) 宮城県多賀城市・新田遺跡．出土したやきもの37百点のうち，中国磁器は2百点（全体の約5％）で，その他の中国製品は78点である．したがって，中国産やきものは約8％を占める．13—14世紀の製品が中心である⁽¹²⁾．

(8) 千葉県内・中世諸城跡

(a) 木更津市・真理谷城. 中国陶磁器8.6百点（やきもの全体の3割）が出土した⁽¹³⁾.

(b) 一宮町・一宮城. 検出された中国磁器は、主として1600年前後の145点（やきもの全体の14%、白磁94点など）である⁽¹⁴⁾.

(9) 東京都八王子市・多摩ニュータウン遺跡. No. 692地点出土の輸入磁器は、主として中世初期の144点（青磁80、白磁44点、など）で、これは、やきもの全体の6%、輸入陶磁器の97%を占めている⁽¹⁵⁾.

(10) 東京都八王子市・八王子城. 城主居館地区（1590年落城）から輸入磁器約3万片が出土した。その中には、明朝万暦期の青花磁器皿約15百枚、さらに、白磁の皿120枚・杯30個、五彩磁器皿20枚が含まれる⁽¹⁶⁾.

(11) 東京都文京区・東京大学本郷構内遺跡

(a) 御殿下記念館地点（加賀藩上屋敷跡）. 532号遺構（1640—50年代前半）から、中国磁器4.2百点（磁器の39%）と肥前磁器6.5百点（同61%）が出土し、678号遺構（1650—60年代中心）からは、中国磁器2.2百点（同13%）と肥前磁器14.6百点（同87%）が発掘された。出土中国磁器の中には、「出土例のきわめて希な上手の製品」が含まれる⁽¹⁷⁾.

(b) 付属病院地点（加賀・大聖寺藩上屋敷跡）. 17世紀後半から19世紀前半までの出土磁器は7.7千個で、陶磁器全体の約6割に達する。しかし、輸入磁器は僅か155個にすぎず、しかも、その中の93個は1682年以前に属する。それに対して、肥前磁器は陶磁器全体の54%を占める⁽¹⁸⁾.

(12) 神奈川県鎌倉市内・中世諸遺跡

(a) 二の鳥居西、南御門、本覚寺、蔵屋敷東、蔵屋敷の5遺跡から、14世紀半ば以前の中国磁器合計33百片（龍泉窯系を中心とした青磁22百、白磁6百、青白磁5百）が発掘された。磁器は輸入陶磁器の9割に達する⁽¹⁹⁾.

(b) 1300年前後を中心とする、千葉地東、千葉地、佐助ヶ谷、今小路西の4遺跡から、中国磁器、約16百点（龍泉窯系を中心とした青磁8百、白磁4.5

百，青白磁3.6百）が検出された．中国陶器と高麗青磁はきわめて少ない⁽²⁰⁾．

(13) 静岡市・駿府城．輸入陶磁器は，戦国時代から江戸時代初期までの263点（やきもの全体の4％）である．その中では青花磁器が最も多い⁽²¹⁾．

(14) 愛知県清洲町・朝日西遺跡．輸入陶磁器は，1200年前後の1遺構において約160点（やきもの全体の1.4％）であり，1400年前後の1遺構において総数12千点中の1％以下である⁽²²⁾．

(15) 岐阜市・岐阜城千畳敷Ⅱ遺跡．16世紀後半の層から輸入陶磁器129点（やきもの全体の1.6％）が発掘された⁽²³⁾．

(16) 福井県永平寺町・興行寺．15世紀前半の遺構出土の輸入磁器，130個（青磁63個，白磁58個，など）は，やきものの総個体数の8割を越える⁽²⁴⁾．

(17) 福井市・一乗谷．1573年焼亡のこの遺跡で出土する中国陶磁器概数①と，やきものの総破片数に占める中国陶磁器の比率②は，次のとおりである．また，中国陶磁器の品種別比率はほぼ青磁4割，白磁4割，青花磁器2割である⁽²⁵⁾．

- (a) 大名館 ①16百点 ②1.5％
- (b) 武家屋敷 ①21百点 ②6.2—6.5％
- (c) 町屋 ①68百点 ②8％
- (d) 寺院 ①28百点 ②7％
- (e) 寺院・町屋 ①43百点 ②13％

(18) 滋賀県安土町・観音寺城．1568年に落城した城跡から，中国磁器260点以上（白磁約160，青花磁器約100点，など）が検出された⁽²⁶⁾．

(19) 京都市・平安京諸遺跡

(a) 中京区・右京3条2坊．10世紀後半の下級貴族の邸宅跡から出土した輸入磁器は，75片（越州窯青磁51，白磁24片）であり，それはやきもの破片総数の3％に当たる⁽²⁷⁾．なお，9世紀後半から10世紀までの平安京域で出土する陶磁器の2—3％は，輸入品であり，その多くが，精良品である．越州窯

青磁と白磁との比率はほぼ2対1である⁽²⁸⁾。

(b) 下京区・左京8条3坊。12世紀末の一遺構の陶磁器のうち、36%＝249片が輸入品である⁽²⁹⁾。

(20) 奈良市・平城京跡。輸入磁器442個（白磁155, 越州窯系・龍泉窯系を中心とする青磁283個, など）が発掘された⁽³⁰⁾。

(21) 奈良市・南都諸寺院。興福寺などから輸入磁器384個（白磁160, 越州窯系・龍泉窯系を中心とする青磁210, 青花磁器44個, ほか）が検出された⁽³⁰⁾。

(22) 奈良県天理市・布留遺跡。輸入磁器約2百個（白磁55, 龍泉窯系を中心とする青磁149個）が出土した⁽³⁰⁾。

(23) 大阪市中央区・大阪城および城下町遺跡（住友銅吹所を除く）

(a) 大阪城および城下町における中国磁器の出土量と、それが出土陶磁器全体に占める比率は、1550—80年に29個、80%（内訳は青花磁器が全体の39%, 白磁22%, 青磁19%）、以後1598年までは243個、63%（青花磁器50%, 白磁10%, など）、以後1610年頃までは235片、30%（青花磁器26%, など）、1615年から22年頃までは225個、21%（青花磁器19%, など）、1630—40年頃に59片、7%（青花磁器7%）であり、最後の時期に肥前磁器が13%をもって出現した⁽³¹⁾。

(b) 中国陶磁器の量と、やきものの全体に占めるその割合は、1580—98年の武家屋敷地の数遺構の合計で210個、約32%であった。町屋の一遺構では、それは1598—1615年に破片240点、約21%であったが、1622年から50年頃まででは破片74点、4%に激減し、肥前磁器が7%をもって出現した⁽³²⁾。

(c) 大阪城・城下町で出土した陶磁器に占める中国製品の比率は、17世紀初に約30%, 同世紀第2四半期前期に約25%, 同世紀第2四半期後期に約10—15%（肥前磁器出現）、1650—60年代に10%以下、18世紀初に5%以下となり、18世紀中頃にゼロとなった⁽³³⁾。

(24) 大阪市中央区・住友銅吹所。1724年の火災後に廃棄された陶磁器が、コンテナで約25箱（最大の遺構からは15箱）出土した。中国磁器は17世紀後

半—18世紀前半の青花，五彩などである．国産陶磁器では肥前磁器（青花五彩金彩，次いで青花）が最も多い．中国磁器の「出土量は日本国内の大名屋敷から出土したものの量をはるかに上回り，質的にも最上質の部類に含まれる」．国産の陶磁器も，「これまで大阪市内の江戸時代遺跡の調査では出土したことの無い上質のもの」である⁽³⁴⁾．

(25) 大阪府堺市・堺環壕都市遺跡

(a) 20遺構の中国磁器は合計31.3百点（青花磁器15.2百，青磁9.3百，白磁6.4百，など）であり，出土したやきものの約3割を占めている⁽³⁵⁾．

(b) この遺跡群で出土した輸入磁器は，次のとおりである．

(i) 14世紀中期から1475年まで：青磁81個（一括廃棄）．

(ii) 1494年から1553年まで：青花磁器が出現する．出土総点数は明示されていないが，各遺構における碗皿類の青磁対青花磁器個体比は3対1あるいは11対0，などである．

(iii) 1553年から75年まで：粗質青花（スワトウ・ウェア）が出現する．青磁対青花の出土個体比は7対32あるいは84対328（他の9遺構でもほぼ同じ）．景德鎮の芙蓉手とスワトウ・ウェアの比率は30対19，など．

(iv) 1596年から1615年まで：出土する陶磁器の器種が，中世と比較して多様化する．出土する陶磁器の構成比は，

青花磁器	白磁	青磁	朝鮮陶磁器	国産陶器
25	5	2	6	12（2遺構）
17			1	2
9	1	6	2	
74		17		89
93		6		90
31		17		
7		3		1
11		3		
18		1	3	18，などであった．

(v) 1680年から1707年まで：中国磁器の輸入途絶と伊万里磁器の高級化のために、両者の代替品として波佐見磁器が普及した。出土伊万里磁器は波佐見磁器の0.5—1%である⁽³⁶⁾。

(26) 和歌山県岩出町・根来寺。5遺構の1585年焼土層から出土した中国磁器は、約24.8百片、やきもの全体の約32%（青花磁器約15%，白磁約14%，など）である⁽³⁷⁾。

(27) 兵庫県伊丹市・有岡城。16世紀第3四半期までの3遺構から、中国磁器約3.5百個（白磁185，青花磁器119個，など）が検出された。これはやきもの全体の約16%に相当する⁽³⁸⁾。

(28) 島根県広瀬町・富田城関連遺跡群。領主館跡（1554年滅亡）から出土した中国磁器は、24.7百点（白磁14百，青花磁器6百，青磁4百，など）で、やきもの全体の38%を占める。富田三太良遺跡と新宮谷大畑地区との出土品のうち80個（陶磁器全体の85%）は、中国磁器（白磁41，青花磁器31個，など）である。新宮谷の他の6ヶ所から出土したやきもの破片の中で、中国磁器544点（白磁264，青花磁器205，青磁75点）は28%を占めている。塩谷上流部からは中国磁器122点（青花磁器67，白磁40点，など）が出土した。これはやきものの約2割に当たる。富田川河床遺跡1980年調査遺構の陶磁器は、252個に復元され、その大部分、228個は16世紀中葉までの中国磁器（青花磁器113，白磁63個，など）である。同河床遺跡1985・87年調査遺構の中国陶磁器（大部分は磁器）は、第1層で336点（やきものの21%），第2層で183点（やきものの約15%）である。同河床遺跡1981年調査遺構において、まず、1644年以前の層から中国磁器250点（青花磁器168，白磁71点，など），肥前磁器87点が検出された。前者はやきものの16%，後者は約6%に当たる。次に、1644年以後の層から出土した中国磁器は、113点（青花磁器81点など），肥前磁器は338点であった。前者はやきものの10%に減少し，後者は30%に増加したのである⁽³⁹⁾。

(29) 広島県福山市・草戸千軒町遺跡。13世紀後半から16世紀初頭までの遺跡

から、貿易陶磁器破片約15千点が出土した。しかし、やきもの全体に占めるその割合は、1％を越えない⁽⁴⁰⁾。

(30) 福岡県太宰府市・太宰府遺跡

(a) ここで1978年までに発掘された貿易陶磁器の「破片は数十万点」である。数量から見ると、「大部分を占めるのは宋代の白磁・青磁で、江南地方の産といわれている白磁および…龍泉窯系の青磁がもっとも多く、福建省同安窯系のものがこれに次いでいる」。初期の出土品には唐・五代の越州窯系青磁、中国北部産白磁などがある。時期的に見ると、8世紀後半から11世紀初頭には白磁と越州窯系青磁が出土し、11世紀中葉から12世紀初頭には白磁だけが出土する。この両期間の出土数は少ない。12世紀中葉から13世紀初頭までは、同安窯系と龍泉窯系の青磁の割合が高い。13世紀中葉には青磁が大部分を占める。13世紀後半から14世紀中葉までは、龍泉窯系青磁が最も多くなり、白磁の比率も回復して、1割を超える。なお、9世紀末から14世紀後半に至る9遺構から出土した青磁・白磁は、5百点である⁽⁴¹⁾。

(b) 8世紀末—10世紀中頃には白磁と越州窯系青磁の比率が高く、11世紀前半には出土量が減少し、11世紀後半—12世紀後半には白磁が約8割を占める⁽⁴²⁾。

(c) 観世音寺南門の前面地域（14世紀初の遺構）から発掘された中国磁器は、青磁106（うち龍泉窯系88）、白磁102、など、計213点で、やきもの全体の85％であった。同遺跡・第45次調査（14世紀前半の遺構）から出土した中国磁器は、青磁110（うち龍泉窯系92）と白磁70、計180点で、やきもの全体の約93％に当たる⁽⁴³⁾。

(d) 観世音寺土居ノ内の一遺構から検出された中国磁器は、白磁161、青磁121（うち龍泉窯系74）、など、計292点（やきものの74％）であり、さらに、輸入陶器91点（同23％）も含まれていた。隣接する今一つの遺構（土壌）から出土した中国磁器は、青磁81（うち龍泉窯系64）、白磁51、など、計137点（やきものの41％）であったが、一般的傾向と異なって、輸入陶器が193点

(同58%)に及んだ。両遺構の陶磁器製作年代は13世紀である。後者の遺構の特殊な出土状態は、「陶磁器流通に関わる商業者集団」の存在を示している⁽⁴⁴⁾。

(31) 福岡市中央区・鴻臚館跡。鴻臚館は、8—11世紀の貿易中心地であった。「出土遺物のうち、…外国製陶磁器の量は、…国産土器類を凌駕し、出土量の6—7割を占める」。大多数は8世紀中葉—11世紀前半の越州窯青磁であり、その破片数は「1万をゆうに越える」。「この数字は、窯跡をのぞく中国国内の各消費地遺跡をふくめても世界最大」である。日本の他の遺跡では、「越州窯青磁は1遺跡で10片以内が普通」であるから、鴻臚館の「特異性」は明白である。「わが国の越州窯青磁の出土品⁽⁴⁵⁾は、エジプトなどのそれと比べて質的に劣る」と主張されてきたけれども、鴻臚館跡出土品のなかには相当量の優品が含まれる。また、日本「出土の粗製越州窯青磁の90%以上は太宰府と福岡地域で」発見される⁽⁴⁶⁾。

(32) 福岡市博多区・博多遺跡群

(a) 「博多遺跡群からは1回の調査で少なくとも1万片以上の貿易陶磁器が出土し、すでに70次をこす調査を重ねている」。このように膨大な量の中国陶磁器は11世紀後半から、鴻臚館に替わって、博多にもたらされ、12世紀中葉に頂点に達した。これらの陶磁器は、「博多を基点として北は陸奥・出羽に、南は奄美・沖縄まで」運ばれ、「急速にわが国の諸階層に普及」した。しかし、13世紀になると、ここの中国陶磁器出土量は急激に減少する⁽⁴⁷⁾。

(b) (i) 祇園駅出入口で出土した破片は、中国磁器24.3百点（うち白磁15.7百、龍泉窯系を中心とした青磁7.5百、など）と輸入陶器13.4百点を含み、やきもの全体に占める割合は、前者54%、後者30%である。(ii) 冷泉町7—1の出土品は、中国磁器233.3百点（うち白磁169百、青磁60百、など）と輸入陶器109.5百点を含み、やきもの全体に占める割合は、前者16%、後者8%である。(iii) 地下鉄1号線A・B区の出土品は、中国磁器203.6百点（うち白磁113百、龍泉窯系を中心とした青磁68百、など）と輸入陶器99百点を含み、やき

もの全体に占める割合は、前者10％、後者5％である。このA・B区では、688百点もの祭祀関係土師器を含む溝が発見されたために、貿易陶磁器の占める割合は低くなっているけれども、貿易陶磁器の構成比は、上記(i)および(ii)のそれにほぼ等しい。(iv)小規模な冷泉町474—9の出土品は、中国磁器6.6百点（うち白磁5.6百、青磁1百、など）と輸入陶器1.2百点を含み、やきもの全体に占める割合は、前者32％、後者6％である。大型陶器は貿易商品の運搬用容器である⁽⁴⁸⁾。

(c) 第14次調査の出土品は、中国磁器22.7百点（うち白磁21.5百、青磁0.6百、など）と輸入大型陶器2.1百点を含み、やきもの全体に占める割合は、前者80％、後者8％である。1100年前後の製品である⁽⁴⁹⁾。

(d) 網場町115から出土した中国磁器は、12.6百点（青花392、白磁350、青磁326、灰白磁111点、など）で、やきもの全体の47％を占める。1600年前後の製品である⁽⁵⁰⁾。

(e) 博多遺跡群には、特異な遺構、すなわち、中国磁器がまとまって検出される土壇や井戸、が点在している。例えば、祇園駅出入口の1土壇からは、青磁（主として龍泉窯製品）を中心として3百個以上が発見された⁽⁵¹⁾。第14次調査区の「白磁溜」は、1100年前後の白磁約16百点を含む⁽⁵²⁾。上呉服町の井戸の出土品は、白磁を中心とした約30個で⁽⁵³⁾、第14次、店屋町4—5のそれは12世紀初頭の白磁80個以上である⁽⁵⁴⁾。博多駅築港線第2次調査の4土壇と1井戸から出土したやきもの、合計13.6百点のうち、4百点（29％）が北宋末の中国陶磁器（ほとんどが白磁で、陶器は29点のみ）である⁽⁵⁵⁾。店屋町4—1の12世紀前後の土壇に陶磁器が廃棄されていたが、その大部分は5百個以上の白磁碗で、しかも、3種類に限定されている⁽⁵⁶⁾。冷泉町46の土壇の陶磁器（12世紀）は、大部分が中国製である。1土壇からは442点（うち白磁313）が出土し、他の1土壇からは69点（うち白磁30）が検出された⁽⁵⁷⁾。

③ 福岡市内の他の遺跡

(a) 南区・柏原M遺跡。800年前後のこの遺跡から越州窯系青磁328片、な

ど、初期貿易陶磁器 4 百片が出土した。この数量は、鴻臚館跡を除くと、日本における初期貿易陶磁器出土量として「とび抜けて多い⁽⁵⁸⁾」。

(b) 東区・多々良込田遺跡。越州窯系青磁81片以上など、中国磁器の合計は95片以上である⁽⁵⁹⁾。

(c) 西区・十郎川遺跡。越州窯系青磁が5百片以上である⁽⁶⁰⁾。

(d) 西区・今津古墓。確認された中国磁器は、99個（青磁68，白磁28個，など）で、陶磁器全体の9割以上である。南宋期龍泉窯の製品が中心で、上質のものが多く⁽⁶¹⁾。

③④ 福岡県豊前市・求菩提山頂遺跡。中国南部産の青白磁，百数十片が発見された。製作年代は12世紀を中心とする⁽⁶²⁾。

③⑤ 熊本県矢部町・浜の館。阿蘇大宮司居館（1586年頃落去）から中国磁器5.6百片以上（青磁5百など）が出土した。青磁は、主として14—15世紀の龍泉窯青磁であり、大型製品を含む⁽⁶³⁾。

③⑥ 長崎県壱岐・原の辻遺跡。初期貿易陶磁器102点（越州窯系青磁72，など）が出土した。これは、やきもの全体の6割を占める⁽⁶⁴⁾。

③⑦ 長崎県内・中世諸遺跡。以下の(a)―(i)において、①は中国産陶磁器の出土破片総数を、②は、やきもの全体に占めるその割合を示す⁽⁶⁵⁾。

(a) 松浦半島・榑檣田遺跡（1100年前後） ① 64百 ②54%

(b) 同・直谷城跡（15—17世紀） ①7.7百 ②42%

(c) 大村湾沿岸・岡遺跡（1100年前後） ①9.9百 ②37%

(d) 同・川井川内遺跡（12—17世紀） ①1.7百 ②51%

(e) 同・坂口館跡（12—17世紀） ①5.8百 ②71%

(f) 同・伊木力遺跡（11—15世紀） ①7.5百 ②77%

(g) 島原半島・今福遺跡（12—14世紀） ①9.5百 ②18%

(h) 壱岐・靚城跡（1472年落城） ① 13百 ②24%

(i) 対馬・大石原遺跡（11—13世紀） ①4.4百 ②41%

(j) 五島宇久島・山本遺跡と西泊遺跡。前者の貿易陶磁器破片4.5百点のは

とんどすべては、中国陶磁器（青磁、白磁、青花磁器など）である。後者の貿易陶磁器破片7.4百点のほとんどすべても、中国陶磁器（青磁、白磁など）である。13—14世紀の製品が両遺跡で最も多い⁽⁶⁶⁾。

③⑧ 長崎県平戸市・オランダ商館跡。1616年頃の造成土中から、1600年前後の中国磁器6.4百点が検出された（陶器はほとんどない）。磁器の87%（5.6百点）は青花磁器で、多くは、精緻で薄手の製品である。これらは、ヴィッテ・レーウ号引揚品と共通するが、国内では堺・長崎以外ではほとんど出土しない。白磁は11%を占める。青磁は1%だけである⁽⁶⁷⁾。

③⑨ 鹿児島県金峰町・持鉢松遺跡。発掘された中国磁器は、3.2百点（青磁2.5百と白磁0.7百）であり、やきもの全体の53%を占める。1200年前後の龍泉窯系青磁が中心である。さらに、輸入陶器の出土量0.6百点（全体の1割）は、「九州沿岸部の遺跡の中では、群を抜く量」であり、その44%は運搬用容器であるから、この遺跡は宋船の寄港地であったであろう⁽⁶⁸⁾。

④⑩ 鹿児島県奄美大島・中世諸遺跡

(a) 笠利町・湊城。出土磁器破片は2百点以上であり、その9割は、14—15世紀の龍泉窯系青磁である⁽⁶⁹⁾。

(b) 宇検村・倉木崎海底遺跡。12—13世紀の中国陶磁器が検出された。磁器は約3百点（陶磁器全体の約7割）で、龍泉窯系青磁が最も多い。約1.5百点（全体の約3割）の褐釉陶器の存在は貿易船の沈没を示すであろう⁽⁷⁰⁾。

④⑪ 沖縄県内・中世諸グスク

(a) 今帰仁村・今帰仁グスク。中国磁器合計111百片（青磁75.7百、白磁19.3百、青花磁器16.2百）が出土した⁽⁷¹⁾。同グスク周辺で検出された中国磁器は、13.8百片（やきものの60%、そのうち青磁41%、青花磁器12%、など）であり、中国陶器8.9百片（同38%）を加えた中国製品は、やきもののほとんど全部を占めている⁽⁷²⁾。

(b) 勝連町・勝連グスクの郭。中国磁器は合計31.4百片（青磁28.1百、青花磁器1.7百、白磁1.6百、など）であり、やきもの全体の42%を占める。こ

これらの多くは、きわめて良質の製品である。さらに、タイ製の可能性のある褐釉陶器28.6百片（同38%）を含めた輸入陶磁器は、全体の8割に達する。磁器で最も多い青磁（同37%）は、主として龍泉窯製品である⁽⁷³⁾。

(c) 恩納村・山田グスク。約200片の中国陶磁器が採集された。大部分は龍泉窯青磁である⁽⁷⁴⁾。

(d) 那覇市・御物グスク。中国磁器10.8百片が検出された。大部分の10.2百片（中国陶磁器全体の92%）が青磁であり、中国陶器は全体の2%にすぎない⁽⁷⁵⁾。

(e) 浦添市・浦添グスク。5.7百片の青磁碗が出土した⁽⁷⁶⁾。

(42) 沖縄県糸満市・伊原遺跡。中国磁器は13.8百点（青磁9.4百、青花磁器2.6百、など）で、やきもの全体の27%を占めている。輸入陶器は17%である⁽⁷⁷⁾。

（注）

(1) 土橋 1997, pp. 73-74 (p. 73の表において、県名欄の山形の下に「福岡」は、福島県の誤植である)。

(2) 吉岡 1997, pp. 116-117。

(3) 佐々木達 1992, pp. 190-196。なお、福建省同安窯で生産された碗は、内外の細い線条の劃花文・櫛目文、および、内底部の円形窪みを特徴としている。中国学会 1991, p. 250。——日本にもたらされた中国磁器に関して、さらに以下の指摘がある。弓場 1991によれば、外国産陶磁器出土品のうち9割以上が中国製である。弓場 1991, p. 23。長谷部・今井 1995によれば、輸入中国磁器の大部分は、浙江省・福建省など中国南部の製品である。日本の中国磁器輸入は、とくに、明代中期、15世紀後半（日本戦国時代）になってから、増大した。長谷部・今井 1995, pp. 102, 124-125。矢部 1994によれば、9世紀から17世紀までの遺跡出土品は、大量の中国磁器を含む。その大部分は粗質のものであり、器種は碗と皿にほぼ限定されている。矢部 1994, p. 156。矢部 1992によれば、平安時代から江戸時代初期に至るまでの「日本特有の現象」として、粗雑な小品が輸入中国磁器の中核をなしている。矢部 1992, p. 413。さらに、矢部 1992, pp. 169-170を参照。三上 1988(b)によれば、平安時代の福岡市鴻臚館遺跡からは相当数の越州窯青磁破片が出土するが、それらの「ほとんどすべては、模様もない、粗末なものであって、遠いフスタートから出るものと格段のちがいがいる」。三上 1988(b), p. 13。フスタート（カイロ旧市遺跡）については後に紹介する。

(4) フォルカー 1981(2), pp. 71-72。なお、それ以前の磁器輸入量として1634年に6千個が

- 記録されている。フォルカー 1981②, p. 70. 以後の輸入量は38年3.2千個, 39年1.6千個, 41年32千個, 42年に14千フロリン相当額の磁器(これは「実に大量」である), 45年229千個, 46年70千個, 49年10千個, 53年567梱の磁器, である。それに対して, 54年以後には磁器は輸入されていない。フォルカー 1981②, p. 72; フォルカー 1981②, pp. 57-60. ただし, 63年には磁器20梱であった。フォルカー 1982(30), p. 66. 時に輸入されているティー・ポットは, 磁器ではなく, 炻器である。フォルカー 1982③, p. 54. さらに, 30年代の輸入量の増加について, 中国学会 1991, p. 365; 矢部 1994, p. 370を, 50年代の減少について, 矢部 1992, p. 412を参照。
- (5) 佐々木達 1986(a), pp. 113, 129.
- (6) 佐々木達 1986(a), pp. 115-116, 128. ただし, 三上・岩本・佐々木 1981によれば, 青磁56, 白磁53, など, 116個である。三上・岩本・佐々木 1981, pp. 66, 69.
- (7) 工藤 1984, pp. 58-60. さらに, 佐々木達 1986(a), pp. 116-117, 130 (15世紀後半から16世紀末の製品が中心である) を参照。
- (8) 鈴木和 1998, pp. 3-8.
- (9) 佐々木達 1986(a), pp. 124, 131.
- (10) 佐々木達 1986(a), pp. 124, 131. なお, 上記(2)―(3), (5)や青森県八戸市・根城(中国磁器百点以下)のような「北日本城館跡から中国陶磁器が出土するのは12世紀からで, 14世紀後半から増加し, 日本製品の1.7倍となり, 15世紀後半から16世紀中葉にかけても」傾向は同じである(2倍前後)。「16世紀後半に中国陶磁と日本陶磁の量的な転換が行われている」。それ以後, 中国陶磁器は少なくなり, 18世紀には用いられなくなる。種類から見ると, 14世紀後半から15世紀には白磁が最も多く, 3割である。16世紀にはいると, 青磁と青花磁器がほぼ25%となるが, 間もなく青花磁器が最も多く, 3-4割を占めるようになる。17世紀には青花主体の有田磁器が5割となる。「中国陶磁の出土率が6割を越え, 日本陶磁の2倍に達するのは(中世)北日本城館に特殊なことである。西・東日本にこれほど高い比率を示す遺跡はみあたらない」。「土器もわずかな量しか発見されていない」。それに対して, 「平安京でも鎌倉でも, 中国陶磁の出土比率を数%という低い数字にしている最大の原因は, 土器が大量に発見されることである」。佐々木達 1986(a), pp. 137-138, 142.
- (11) 八重樫 1997, pp. 136-137. なお, 出土したやきものの総量は不明である。
- (12) 千葉 1995, pp. 5-8.
- (13) 馬淵 1995, p. 54; 小野 1991, p. 66. なお, 亀井 1986(p. 356)によれば, 磁器は, 16世紀前半の製品を中心とする8.4百片(白磁5.3百, 青花磁器2百, 青磁1.1百)であった。さらに, 褐釉50片(したがって, 中国陶磁器の合計は8.9百)などもあった。
- (14) 小野 1991, pp. 64-65. さらに, 馬淵 1995, pp. 46, 54を参照。
- (15) 馬淵 1995, pp. 46, 53.
- (16) 戸井 1998, pp. 34, 38, 41.
- (17) 堀内 1991, p. 199.
- (18) 成瀬・堀内 1990(a), p. 23; 成瀬・堀内 1990(b), p. 79. さらに, 佐々木達 1997, pp. 165-166を参照。なお, 同L32-1遺構(1682年下限)からは, 中国磁器79個体(磁

- 器の11%)と肥前磁器647個体(同89%)が検出された。堀内 1991, p. 199. 堀内秀樹氏の教示によれば、本郷構内遺跡から出土した中国・肥前磁器は、圧倒的に青花であり、五彩は約1割、青磁はきわめて少なく、白磁はほとんどない。また、付属病院地点から出土した、1650年代から幕末までのやきもの破片総数は、50ないし60万点である。
- (19) 手塚 1984, pp. 27, 30. さらに、手塚 1984, p. 30; 服部 1985, p. 145によれば、蔵屋敷遺跡の中国磁器7.7百点は出土陶磁器全体の14%に当たる。なお、手塚直樹氏の教示によれば、鎌倉市材木座海岸で、多くの人々によって中国陶磁器破片が採集されており、その数は数万に達するであろうが、詳細は不明である。
- (20) 田代 1995, pp. 17, 19-23.
- (21) 馬淵 1995, p. 52.
- (22) 馬淵 1995, p. 50.
- (23) 馬淵 1995, p. 48.
- (24) 富山 1993, pp. 128, 132.
- (25) 小野 1984(a), pp. 75-76, 78. ここでは毎年約2-5万点の遺物が採集され、その中の9割がやきものである。青花、白磁、青磁を中心とした中国陶磁器は、7-8%を占める。小野 1983, p. 73.
- (26) 清水 1990, pp. 79, 81. なお、出土やきものの総量は不明である。
- (27) 永田 1982, pp. 22-23; 亀井 1986, p. 118.
- (28) 永田 1982, pp. 22-23. さらに、亀井 1986, p. 117 (10世紀-11世紀前半の平安京出土青磁のうち、9割以上は精良品である。それに対して、太宰府と鴻臚館では、粗製品が5割に近い)を参照。
- (29) 亀井 1986, p. 30. なお、平安京出土中国磁器として、中京区・右京3条2坊の13片(総数432片中の3%), 下京区・左京8条3坊の34片(青磁24, 白磁10)もある。永田 1982, pp. 22-23.
- (30) 土橋 1982, 表2-1, pp. 48-49.
- (31) 森 1997, pp. 14, 17 (なお、同氏の回答によれば、図9の「国産施釉陶磁器」は施釉陶磁器、の誤植である); 森 1995, p. 98. 森毅氏の教示によれば、大阪出土の中国陶磁器の中では青花磁器が最も多く、白磁は少量である。青磁のほとんどは伝世品である。
- (32) 森 1995, pp. 89, 97-98. さらに、佐々木達 1997(a), p. 167を参照。
- (33) 森 1998, 追加資料③, 表6.
- (34) 松尾信 1992, pp. 216, 230. 森村健一氏の教示によれば、中国磁器は373点(青花356, 五彩12, など)=陶磁器総数の59%, 肥前磁器は238点(青花119, 五彩107, など)=同37%である。
- (35) 森村 1984, p. 47.
- (36) 森村 1992(a), pp. 48-49, 51-54, 56-57. なお、スワトウ・ウエアは、16世紀後半から18世紀中葉まで福建省漳州窯で焼成され、器形と文様において景德鎮窯系磁器を模造した、青花・五彩・瑠璃地・素三彩である。その胎土には、緻密でない磁器質のものと、軟質の陶器質のものとの2種類があるけれども、両者は同じ時期に生産された。文様は太筆書きで省略化されている。日本における出土量は、16世紀後半には景德鎮窯系

- 青花磁器の1—2%にすぎないが、16世紀末から17世紀初頭には約9割に達した。堺環濠都市遺跡で見ると、漳州窯系の比率は、土蔵跡(多くの景德鎮窯系磁器が来客用組物として出土する)では僅か5—10%であるが、生活遺構では4割前後に達する。しかし、17世紀中葉から18世紀中葉には、全体の2割以下に減少した。森村 1995, pp. 364-365, 369-370.
- (37) 村田 1988, pp. 162-164, 171.
- (38) 川口 1988, pp. 113, 115.
- (39) 村上勇 1987, pp. 22-23, 26-32.
- (40) 鈴木康 1995, pp. 25-26. さらに、鈴木康 1994, p. 133; 佐藤・大上 1989, p. 93を参照.
- (41) 横田・森田 1978, pp. 1, 25, 第3表.
- (42) 山本 1988, pp. 74-75. なお, pp. 78, 80, 82から合計した出土「総点数」は、150点であり、陶器はきわめて少ない.
- (43) 横田・森本・山本 1989, pp. 16, 18, 20-21, 25.
- (44) 山本 1990, pp. 84-85, 91, 103, 108, 111.
- (45) 越州窯青磁の精良品においては、素地は、灰白色ないし白灰色の緻密な磁質土であり、発色の良い、淡緑色ないし黄緑色の釉が、内・外全面に施されている。粗製品においては、素地は、灰色ないし暗灰色の陶質であり、釉は、発色の悪い暗緑色であって、体下半部は施釉されていない。両者は、同じ時代に製作され、遺跡の同一層から出土する。亀井 1986, pp. 62, 157, 217-218, 247.
- (46) 亀井 1995, pp. 113-114, 126, 130. なお、土橋 1986は、11世紀初頭までの鴻臚館出土中国青磁破片を250以上としている。土橋 1986, p. 173.
- (47) 亀井 1995, pp. 128, 130. 吉岡 1997も、博多遺跡群では「1調査地点の中国陶磁が1万片を超えるのが普通」である、と記している。吉岡 1997, p. 116. 亀井 1995によれば、冷泉町7—1遺跡の貿易陶磁器34千点(後述)は、「個体数にすれば1万個をくだらない数量である」。したがって、韓国新安沖で引き揚げられた陶磁器約2万個が、中国陶磁器の日本出土総数に匹敵する、との見解は誤りである。亀井 1995, p. 128. なお、博多に1105年に来航した一宋船の積載磁器を、佐伯 1994 (p. 289) は碗4万個と皿2万個、それに対して、亀井 1992 (p. 130) ; 亀井 1986 (p. 181) は碗4千個と皿2千個と想定している.
- (48) 池崎 1984, pp. 22-23 (第4次調査区は冷泉町7—1で、第10次調査区は冷泉町474—9である。折尾・池崎・森本 1984, p. 323) . なお、上記(ii)と(iii)および、1土壌を除く(i)について、折尾・池崎・森本 1984, p. 336を、1土壌を除く(i)について、佐伯 1994, p. 288を、(ii)と(iii)について、池崎・森本 1983, p. 13を、(ii)について、亀井 1986, pp. 267-269を参照.
- (49) 池崎・森本 1988(a), pp. 41, 46-48 (第14次調査区は店屋町4—15である。折尾・池崎・森本 1984, p. 323) .
- (50) 小畑 1993, pp. 31-32. なお、佐伯 1994, p. 293を参照.
- (51) 亀井 1997(a), p. 80 (351個以上) ; 亀井 1995, pp. 129-130 (12世紀後半) ; 佐伯

- 1994, p. 289; 山本 1990, pp. 106-107 (13世紀の353点); 池崎・森本 1988(b), p. 146 (12世紀後半の青磁3百個など); 折尾・池崎・森本 1984, pp. 339-340, 345-349 (12-13世紀).
- (52) 池崎・森本 1988(a), pp. 46-48. なお, 亀井 1997(a) (p. 80); 亀井 1995 (p. 129) は, この白磁碗を約5百個と推定している.
- (53) 池崎・森本 1988(b), p. 139. 博多に11世紀後半から「洪水のように」流入した白磁は, 前代に鴻臚館跡で出土する, 上質の白磁と異なっており, 広東・福建産の大量生産品である. 池崎・森本 1988(b), pp. 141-142. 中世に博多に輸入された中国磁器のほとんどは, 青磁を含めて, 日常雑器である. 折尾・池崎・森本 1984, p. 338.
- (54) 池崎・森本 1988(b), pp. 139-140; 佐伯 1994, p. 289.
- (55) 大庭 1988, pp. 19, 24.
- (56) 亀井 1997(a), p. 80. さらに, 亀井 1995, p. 129 (6百個以上); 佐伯 1994, p. 289 (6百個以上の白磁と陶器) を参照.
- (57) 森本 1996, pp. 19, 50. ——南宋政府の貿易奨励策のために, 浙江・福建・広東・江西などの中国南部地方産磁器輸出, したがって, 日本への輸入, が増大した. 中国磁器がまとまって発見される, 博多遺跡群のいくつかの地点は, 「宋商人の貿易活動によってもたらされた陶磁器の集積地であり, 日本国内への卸問屋の店舗が」ここにあったのである. 亀井 1997(a), pp. 80-81. さらに, 亀井 1995, p. 131を参照.
- (58) 亀井 1992, p. 137.
- (59) 土橋 1985, p. 173. ただし, 亀井 1986, p. 128では, 越州窯系青磁60片以上.
- (60) 亀井 1986, p. 128.
- (61) 亀井 1986, pp. 255-257. さらに, 折尾・池崎・森本 1984, p. 322を参照.
- (62) 亀井 1986, p. 253.
- (63) 桑原 1983, pp. 46-47, 49.
- (64) 宮崎 1998, p. 45.
- (65) 宮崎 1998, pp. 49-51 (なお, (i)の大石原遺跡は, 朝鮮半島産陶磁器が中国陶磁器を上回る, 長崎県内唯一の遺跡である); 宮崎 1994, pp. 88, 91. さらに, 土橋 1997, p. 67を参照.
- (66) 塚原 1994, pp. 48, 50.
- (67) 加藤 1994, pp. 55-56, 58-59, 66. さらに, 萩原 1990, p. 21を参照. ヴィッテ・レーウ号引揚品については後に紹介する. なお, 長崎市の事情に関して2点を付記する. (1) 万才町遺跡については輸入品の比率が示されている (出土点数は不明). すなわち, 1571-1601年に約97% (そのほとんどは中国産で, 青花磁器が約77%, 後者の約95%が景德鎮系の精良品で, 約5%だけが福建・広東産の粗製品), 1601-10年代 (「1061」は1601の誤植) に約97% (そのほとんどは中国産であり, 青花磁器が約6割, 精良品は後者の76%に減少し, 粗製品が23%に増加), 1610年代-50年代に約92% (そのほとんどは中国産で, 青花磁器が約55%, 後者の78%は精良品, 22%が粗製品) であった. しかし, 1650年代-90年代には輸入品の比率は約13%に激減した. これも中国産 (スワトウ・ウエア) が中心である. 1690年代以後には輸入陶磁器はほとんど見られない. 宮

- 崎 1998, pp.54-55. さらに, 西田・出川 1997, p.139 (16世紀後半では, 中国陶磁器は90%, そのうち, 景德鎮産92%, 呉州手8%である. 17世紀初めの10年間には, 中国陶磁器は97%, そのうち, 景德鎮産76%, 呉州手23%である. ——いずれの場合にも, 青花磁器という中間項が欠落している)を参照. (2)長崎代官でもあった豪商四代目末次平蔵が, 1676年に追放された. この時没収された12百個の陶磁器の中に, 中国磁器6.8百個 (陶磁器の56%)と肥前磁器3百個 (同25%)が含まれていた. 坂井 1998, pp. 30, 34-35.
- (68) 宮下 1998, pp.72, 77, 79-84.
- (69) 亀井 1993, p. 24, 26.
- (70) 手塚・元田・中山・足立 1997.
- (71) 知念 1988, p. 180. 同論文, p. 174では, 中国陶磁器は全体の95%以上とされている (出土品総数は不明). 亀井 1997(b) (p. 43) によれば, 中国褐釉陶器も大量に発掘された.
- (72) 知念 1988, p. 180. なお, 同論文, p. 175では, 中国陶磁器65%, 土器35%とされている.
- (73) 亀井 1984, pp. 34-37, 39. さらに, 亀井 1997(b), p. 43; 亀井 1993, p. 31; 国吉 1991, p. 13 (青磁は中国陶磁器の36%); 知念 1988, p. 171 (出土品合計55百点); 亀井 1986, p. 346 (中国陶磁器15千点)を参照. また, 元様式青花磁器250点以上も発見された. 亀井 1986, p. 290; 亀井 1984, p. 36.
- (74) 亀井 1986, p. 305.
- (75) 知念 1988, p. 181. さらに, 国吉 1991, pp. 12-13, 19 (青磁の比率が, 他のグスクと比較して, 異常に高い. また, 産地は広東省の可能性が大きい)を参照.
- (76) 国吉 1991, p. 15. ただし, やきものの出土総量は不明である.
- (77) 知念 1988, pp. 175, 180 (表5の出土量の合計は5146であり, 3748は誤植であろう. また, 同表の種目別比率は私には理解不能である). ——琉球国の磁器貿易について以下を付記する. (1)亀井 1997(a)によれば, 日本本土でも東南アジアでも, 中国陶磁器の出土量が14世紀後半から15世紀まで非常に少なくなる. それに対して, 同じ時期の琉球では, 1377年に明朝皇帝が陶磁器約7万個を琉球国王に贈って以来, 中国陶磁器が膨大に流入しており, 日常生活にも広く普及していた. しかも, 琉球国王は毎年のように明に進貢したから, 内部消費を超えた中国陶磁器は, 再輸出された. 琉球国王からシャムへの礼物, 青磁碗2千個以上 (1425年), マラッカへ同量 (1463年) がそれを示している. これらの国々への明からの直接賜与は, 「琉球と比較するとはるかに少ない. したがって東南アジアにもたらされた中国陶磁器, とりわけ明代の竜泉窯青磁は琉球の交易によるものが多いであろう.」さらに, 朝鮮半島にも中国磁器は, 琉球国王から直接に, あるいは, 九州の商人を介して, もたらされた. 「このような琉球による中継貿易の盛行時期は14世紀の後半から15世紀までであり, 16世紀になると, その貿易は急速に衰退した. 亀井 1997(a), pp. 85-87. (2)亀井 1997(b)によれば, 磁器を持ち帰った, と記録されている, 明国への琉球進貢船は, 1374年から1570年までに111隻である. 1374年の賜与=1隻7万個を全進貢船にあてはめると, 陶磁器777万個がもたらされたことにな

る。このうち、グスク（合計して約420箇所あり、1箇所平均の消費陶磁器を35百個と仮定すると、その総量は約150万個）と一般人のために合計300万個が琉球内で需要され、残りの477万個が東南アジアに再輸出されたであろう。なお、琉球から東南アジア諸国に派遣された船で、磁器の積載が明記されたものは、1419年から1570年までに「65隻、1隻あたり7万点が積載された」とすると、（合計）455万点となる（1614年にジャワを出帆したオランダ船も、69千個の陶磁器を積んでいた。「この程度の数量でないと、陶磁貿易として成り立たないのであろう」）。15世紀前半に中国から琉球に運ばれた陶磁器は、主として龍泉窯青磁であった。沖縄で出土する中国陶磁器、とくに、青磁は15世紀後半以後減少する。それに対して、16世紀初めから琉球の交易品目録に再登場する磁器は、景德鎮窯を中心とした青花磁器であろう。しかしながら、16世紀後半において沖縄県内諸遺跡の青花磁器出土量は、九州以北の山城跡などのそれよりも少ない。また、琉球の東南アジア派遣船の数は1520年代から漸減し、1570年が最後となった。亀井 1997(b), pp. 43-45, 48, 50-51, 55-56。さらに、国吉 1991, pp. 5, 12-15, 19（東南アジアに派遣された、琉球の交易船は、青磁を主要交易品としていた。沖縄で発見される青磁も、東南アジア諸国で出土する青磁も、品質は精粗さまざまである。これらの青磁は、龍泉窯よりもむしろ、福建省など中国南部沿海地方で生産された）；知念 1988, pp. 172, 174, 182（琉球では、元代末期から明代の中国陶磁器が最も多く出土する。重要なグスクでは、中国陶磁器が出土品の8—9割を占める。大量の中国陶磁器が輸入されたために、土器は使用されなかった）；三上 1987, pp. 204, 216を参照。